

形而上学が「存在-神-論」的体制を持つというハイデガーの指摘は何を意図しているのか

上田圭委子(首都大学東京)

形而上学が「存在-神-論」であるという指摘は、ハイデガーに由来するものとして、広く知られている。この指摘は、形而上学がすでにギリシア人のもとで始まった時から「存在についての学」(GA26,13)としての存在論であると同時に神的なもの、すなわち「超力的なものの学」(GA26,13)としての神論でもあったというハイデガーのアリストテレス解釈にも見られるものであるが、1930年代から1950年代に至る幾度ものヘーゲル解釈において、ヘーゲル哲学の体制を指すものとして、繰り返し登場してくる。ハイデガーは、『形而上学の存在-神-論的体制』(1956/57)においてもヘーゲルとの対決から出発しつつ、形而上学は、存在-神-論であり、この場合の神とは、哲学の内て論じられる、自己原因(causa sui)としての神であるとしたうえで、「かかる神に対して人間は祈ることもできず、また犠牲を供することもできない」し、「自己原因の前に人間は畏怖の念からひざまずくこともできず、またかかる神の前で音楽を奏したり踊ったりすることもできない」とし、自己原因としての神を「あきらめなければならぬ」「神-無き思考」の方が、「神らしい神におそらくより近い」(GA11,77)とするのである。とはいえ、その場合の「神らしい神」に「近い」とはどのような事態を指すのか、また存在とそうした「神らしい神」との関係は、どのように理解すればよいのかについては、ハイデガーは、明瞭に語っているとは言えない。

本発表では、ハイデガーの思索の道における「形而上学」という語の位置づけの変遷とその背後にある存在思想の一貫性を1929年の「形而上学とはなにか」(以下WM)およびその1943年のあとがき、1949年の序論をもとに確認し(1節)、ついで1930/31年のヘーゲルの『精神現象学』講義における「存在-神-論的」あるいは「存在-神-自我-論的」という語がどのような事柄を指して用いられているのかを見る。また40年代のヘーゲル解釈(『精神現象学』の序論を扱った「ヘーゲルの経験概念」(1942/43)、1950年代のヘーゲル演習をもとに成ったハイデガーの『形而上学の存在-神-論的体制』(1956/57)を取り上げ、これらのヘーゲル解釈に即して、形而上学は存在-神-論であるというハイデガーの指摘の内実をさらに検討する。そのうえで、ハイデガーが言う「形而上学から形而上学の本質への歩み戻り」(GA11,60-61)とはどのようなことであるのかを考察する(2節)。最後に、ハイデガーにおける「存在」と「神らしい神」の内実とその関係について考察し(3節)、ハイデガーによる《形而上学は「存在-神-論」である》という指摘の意図の理解を試みる(結論)。

1. ハイデガーにおける「形而上学」という語の内容の検討

1929年にはハイデガーは、「形而上学は〈人間の本質〉に属している」(WM44)とし、また「形而上学は現存在における根本生起」であり「現存在自身である」としていた(WM45)。これに対して1943年のあとがきにおいては『形而上学とは何か』の問いは、形而上学を超えて問うている」であり、この問いは、「すでに形而上学の克服の中に入り込んでいる思索に由来している」(WM46)とし、「形而上学は、そもそも存在の真理の領域を動いている」のだが、「形而上学にとっては知られず、根拠づけられていない根拠にとどまっている」(WM47)としていた。また1949年の序論においては、「形而上学は絶えず存在者としての存在者のみを表象している限りは、存在自体のことを思索してはいない」

(WM9)のであり、「形而上学は、存在の真理を思索することの内て克服される」とされ(WM9)、また「存在の真理」は「その中で形而上学が、哲学がそこから養われるところの哲学の木の根として要請されているところの土台」(WM8)であるとも言われていた。これらを整合的に解するためには、「形而上学の本質」であり、形而上学がその内を動いている「存在の真理」をも含むものを広義の「形而上学」と見る必要がある。これはハイデガーにおいて依然として維持されるべきものであると言えよう。他方ハイデガーによって克服されるべきものとされ、また存在者の存在を問うが存在そのものを問わないとされる「形而上学」は、いわば狭義の「形而上学」であると捉えられよう。「形而上学」が人間の本質に属するものであるという前期の発言も、広義の「形而上学」を指すものと解すれば、後期に至るまで一貫して通用するものとして受け取ることができよう。また、(狭義の)「形而上学」には「あくまでも隠されたままにとどまっている」とされる「開けた明るみそのものとしての存在の真理」は、後期の開始点である1932年以降の講義等を参照するならば、存在者の只中に巻き込まれている状態から解放され、存在者としては無である存在そのものの立ち現れの間へと出で立つこととのうちで存在が露わになってくるとと解し得る。この表象不可能なものの現成化の間へと向き直り、存在の呼び求める促しへと聴従し、その存在の真理を言葉へと齎すことが狭義の形而上学とは異なる存在の思索、すなわち「形而上学の本質」まで含めた広義の「形而上学」と解し得る。

2. ヘーゲル解釈と「存在-神-論」の内実

ハイデガーは初期のアリストテレス解釈の中でアリストテレスにおける「神的なもの」は万物の運動原理である「純粋な現実態」としての「第一の動かす者」(GA62,109)であるとしていた。これに対して、ヘーゲルにおける存在-神-論の「神」に相当するのは、1940年代のハイデガーのヘーゲル解釈の内実からすれば、「絶対者の臨在」と呼ばれているもののうちで見届けられているように思われる。しかしながら、50年代の論文では「神」は、「哲学の神」としての「自己原因」あるいは「最高存在者」としての万物の根拠という意味で用いられている。これらはヘーゲル解釈において40年代に見て取られていた、すべてのうちに臨在している絶対者とは異なる神概念であるように思われる。したがって50年代の論文の「神」という語は、「神らしい神により近い」ものとしての「存在」そのものへと私たちを向き直らせるために、あえて否定されるべきもののみを表現する言葉として、極めて限定的な意味において用いられていると考えざるを得ない。

3. 「神らしい神」により近い「存在」とハイデガーの意図

ハイデガーが、前述のような形で、哲学における「神」の意味をいわば低く限定したのは、存在者から見れば無である「存在」こそが、私たちの自己を含めたすべてのものを在らしめている真に神々しいものと考えているがゆえであると思われる。ハイデガーにとっては、「存在」こそが、その「恵みの保持への道行きへと向かって、存在者と別れること」としての「犠牲」(vgl. GA9,310)を捧げ、また畏怖の念を持ってそれへと聴従帰属すべきものののである。こうした存在の思索の根底には、「コジマへの書簡」で披瀝されているような、存在者をひたすら用立てつつも、それを在らしめている存在を忘却した現代の技術社会における「Stellenの力」(GA11,156ff)に対する強い危機感があったものと考えられる。

※Vittorio Klostermann社のハイデガー全集からの引用は、(GA巻数、頁数)において示した。